女

芥川龍之介

雌蜘蛛(めぐも)は真夏の日の光を浴びたまま、紅い庚申薔薇(こうしんばら)の花の底に、じっと何か考えていた。

すると空に翅音(はおと)がして、たちまち一匹の蜜蜂が、なぐれるように薔薇の花へ下りた。蜘蛛(くも)は咄嗟(とっさ)に眼を挙げた。ひっそりした真昼の空気の中には、まだ蜂(はち)の翅音の名残(なご)りが、かすかな波動を残していた。

雌蜘蛛はいつか音もなく、薔薇の花の底から動き出した。蜂はその時もう花粉にまみれながら、蕊(しべ)の下にひそんでいる蜜へ嘴(くちばし)を落していた。

残酷な沈黙の数秒が過ぎた。

紅い庚申薔薇(こうしんばら)の花びらは、やがて蜜に酔(よ)った蜂の後

へ、おもむろに雌蜘蛛の姿を吐(は)いた。と思うと蜘蛛は猛然と、蜂の首もとへ跳(おど)りかかった。蜂は必死に翅(はね)を鳴らしながら、無二無三に敵を刺(さ)そうとした。花粉はその翅に煽(あお)られて、紛々と日の光に舞い上った。が、蜘蛛はどうしても、噛みついた口を離さなかった。

争闘は短かった。

蜂は間もなく翅が利(き)かなくなった。それから脚には痲痹(まひ)が起った。最後に長い嘴(くちばし)が痙攣的(けいれんてき)に二三度空(くう)を突いた。それが悲劇の終局であった。人間の死と変りない、刻薄な悲劇の終局であった。——一瞬の後(のち)、蜂は紅い庚申薔薇の底に、嘴を伸ばしたまま横(よこた)わって

いた。翅も脚もことごとく、香（におい）の高い花粉にまぶされながら、…………

雌蜘蛛はじっと身じろぎもせず、静（しずか）に蜂の血を啜（すす）り始めた。

恥を知らない太陽の光は、再び薔薇に返って来た真昼の寂寞（せきばく）を切り開いて、この殺戮（さつりく）と掠奪とに勝ち誇っている蜘蛛の姿を照らした。灰色の繻子（しゅす）に酷似（こくじ）した腹、黒い南京玉（ナンキンだま）を想わせる眼、それから癩（らい）を病んだような、醜い節々（ふしぶし）の硬（かた）まった脚、――蜘蛛はほとんど「悪」それ自身のように、いつまでも死んだ蜂の上に底気味悪くのしかかっていた。

こう云う残虐を極めた悲劇は、何度となくその後繰返された。が、紅い庚申薔薇の花は息苦しい光と熱との中に、毎日美しく咲き狂っていた。――

その内に雌蜘蛛はある真昼、ふと何か思いついたように、薔薇の葉と花との隙間をくぐって、一つの枝の先へ這い上った。先には土いきれに凋んだ莟が、花びらを暑熱に扭られながら、かすかに甘い匀を放っていた。雌蜘蛛はそこまで上りつめると、今度はその莟と枝との間に休みない往来を続けだした。と同時にまっ白な、光沢のある無数の糸が、半ばその素枯れた莟をからんで、だんだん枝の先へまつわり出した。

しばらくの後（のち）、そこには絹を張ったような円錐形（えんすいけい）の嚢（ふくろ）が一つ、眩（まばゆ）いほどもう白々（しろじろ）と、真夏の日の光を照り返していた。

　蜘蛛は巣が出来上ると、その華奢（きゃしゃ）な嚢の底に、無数の卵を産み落した。それからまた嚢の口へ、厚い糸の敷物を編んで、自分はその上に座を占めながら、さらにもう一天井（ひとてんじょう）、紗（しゃ）のような幕を張り渡した。幕はまるで円頂閣（ドオム）のような、ただ一つの窓を残して、この獰猛（どうもう）な灰色の蜘蛛を真昼の青空から遮断（しゃだん）してしまった。が、蜘蛛は——産後の蜘蛛は、まっ白な広間のまん中に、痩（や）せ衰えた体を横たえたまま、薔薇の花も太陽も

蜂の翅音（はおと）も忘れたように、たった一匹兀々（こつこつ）と、物思いに沈んでいるばかりであった。

何週間かは経過した。

その間に蜘蛛の嚢の中では、無数の卵に眠っていた、新らしい生命が眼を覚ました。それを誰より先に気づいたのは、あの白い広間のまん中に、食さえ断（た）って横（よこた）わっている、今は老い果てた母蜘蛛であった。蜘蛛は糸の敷物の下に、いつの間にか蠢（うごめ）き出した、新らしい生命を感ずると、おもむろに弱った脚を運んで、母と子とを隔てている嚢（ふくろ）の天井を噛（か）み切った。無数の仔蜘蛛（こぐも）は続々と、そこから広間へ溢（あふ）れて来た。と云う

よりはむしろその敷物自身が、百十の微粒分子（びりゅうぶんし）になって、動き出したとも云うべきくらいであった。

仔蜘蛛はすぐに円頂閣（ドオム）の窓をくぐって、日の光と風との通っている、庚申薔薇（こうしんばら）の枝へなだれ出した。彼等のある一団は炎暑を重く支えている薔薇の葉の上にひしめき合った。またその一団は珍しそうに、幾重（いくえ）にも蜜の匂（におい）を抱（いだ）いた薔薇の花の中へまぐれこんだ。そうしてさらにまたある一団は、縦横に青空を裂（さ）いている薔薇の枝と枝との間へ、早くも眼には見えないほど、細い糸を張り始めた。もし彼等に声があったら、この白日の庚申薔薇は、梢（こずえ）にかけたヴィオロンが自（おのずか）ら

風に歌うように、鳴りどよんだのに違いなかった。

しかしその円頂閣（ドオム）の窓の前には、影のごとく瘦（や）せた母蜘蛛が、寂しそうに独り蹲（うずくま）っていた。のみならずそれはいつまで経っても、脚一つ動かす気色（けしき）さえなかった。まっ白な広間の寂寞（せきばく）と凋（しぼ）んだ薔薇の莟（つぼみ）の匂と、――無数の仔蜘蛛を生んだ雌蜘蛛はそう云う産所（さんじょ）と墓とを兼ねた、紗（しゃ）のような幕の天井の下に、天職を果した母親の限りない歓喜を感じながら、いつか死についていたのであった。――あの蜂を噛み殺した、ほとんど「悪」それ自身のような、真夏の自然に生きている女は。

（大正九年四月）

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房
１９８６（昭和61）年12月1日第1刷発行
１９９６（平成８）年４月１日第８刷発行
底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房
１９７１（昭和46）年３月～１９７１（昭和46）年11月
入力：j.utiyama
校正：earthian
１９９８年12月28日公開
２００４年３月９日修正